



第77回 コロナ禍とコミュニケーション

▼コロナ禍の日々

新型コロナウイルス感染症の流行で、医療現場にいる私たちはウイルスに感染しないように、慎重な行動を求められる。三密の状態を避け、感染者の多い地域(ex.東京)への移動はできない。もし移動したら、大学病院の中にウイルスを持ち込ませないため、帰取に戻って14日間の自宅待機が命じられる。医学生も同じルールを守らねばならない。さらに医学生の場合、感染対策のため多数が集まる講義や実習ができないことも多く、ふつうの授業に代わりインターネットを使ったオンライン講義が増えていく。ZoomやGoogle meetという聞き慣れないオンラインツール(道具)を使う機会が増えてきた。

▼SFのコミュニケーション

オンラインとは、いわゆる昔でいうテレビ電話である。小さい頃、SFのアニメにでてくるテレビ電話をみて、すごいなと思っていた。半世紀がたち、今は皆がスマホを持って、いつでもどこでもテレビ電話ができるようになった。とくに、直近の半年間はオンラインばかりだったが、便利ないっぽうで、何かもの足りないという感じも強かった。スマホやパソコン画面を通して、相手の顔は見えるし声もよく聞こえる。でも、相手が目の前にいて会話するのは、何かが違うのだ。その物足りなさが何だろうかと考えていて、どうやら「空気感」や「場の一体感」のようなものではないか、と思い当たった。

▼「空気」を感じる

場の空気とか一体感は、なかなか説明しづらいものだ。相手とのコミュニケーションには、会話の内容だけでなく、表情や声のトーン、間の置きかた、身体全体の動き(非言語的な情報)も含まれる。対面して話す時のような、同じ場の空気の中で

共振するような感覚が、オンラインではあまり感じられない。言葉という<情報>ではない、<身体感覚>のようなものが、うまく伝わらないのだ。相手が目の前にいれば、無意識で感じる相手の目の動きや表情、身体所作、体温、におい、まで感じることができる。いわゆる複合した身体要素が絡んでくる。面白いことに、何度もオンラインを繰り返していると、徐々に違和感がなくなり慣れてくる。いつのまにか、対面のコミュニケーションに大切なものも失われていくのではないかと、不安になる。でも、どんなに技術が進んでも、人間同士の生々しいコミュニケーションは、なくなってしまうだろう。人類がどんなに進歩しても、人間は<身体>という拘束から自由になることは、決してできないのだから。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにくち しんいち)